

臣子調子のち内大臣御氣色によりて、笏をさして御笛を取て、御座の下にすゝみてこれを奉る。主上冷泉御ふえをとらせおはしまして後、拍子奉仕せらるべきよし内大臣に仰らる。大臣仰を承て座に歸りつきて安名尊をとなふ、律曲の終りに諸卿に御衣をたまはすをのく退出、今度殿上人の祿はなかりけるとかや、

〔後冷泉院根合〕殿上根合 永承六年五月五日

題 菖蒲 時鳥 早苗 祝 戀

作者 左方 左馬頭源經信朝臣持一 權左中辨藤原資行持一 藏人修理亮藤原隆資勝一

式部大輔藤原國成朝臣持一 相模持一 右方 右近中將源顯房持一 右近中將資綱朝臣

持一 右近中將源經俊持一 少納言源信房頁一 良暹法師持一

一番 菖蒲

左持

左馬頭源經信朝臣

萬代にかはらぬものは五月雨のまづくにかほるあやめなりけり

右

良暹法師

つくま江のそこのふかきはよそながらひけるあやめのねにてまゐる哉

二番 時鳥

左持

權左中辨藤原資行

ほと、ぎすたゝ一聲に過ぬれば又まつ人になりぬべきかな

右

右近中將源顯房

うたゝねの夢にやあらんほと、ぎすまたともきかで過ぬなる哉

三番 早苗